

鹿比

SHIKA

登場人物 バスの運転手

男子生徒・太郎

女子生徒・しょうこ(声のみ)

男子生徒・友貴(声のみ)

先生(声のみ)

女子生徒・小百合(声のみ)

幼稚園の友達・コースケ(声のみ)

少女・アキ(声のみ)

みゆき(声のみ)

運転手はバスを降りる生徒達を見送っている。

運転手 はい行つてらっしゃい。はい、行つてらっしゃい。はい、行つてらっしゃい。はい、行つてらっしゃい。

運転手、ほっと一息ついて、バスを発進させようとする。
が、最後部座席に座っている男子生徒に気付く。

運転手 着きましたよ。

男子 あ、はい。

運転手 ん？

男子 …(窓の外を見る)。

運転手 どうしたの？みんな行つちやうよ。

男子 あ、ココどこですか？

運転手 ここはね、春日大社の駐車場

男子 ああ。

運転手 ほら、行つちやうよ。

男子 あ、はい。

運転手 …ん？

男子 あ、みんなどこ行くんですか？

運転手 さあ、自由行動だつて聞いたけど？

男子 ああ、自由行動。

運転手 だからどこでも行つてイイみたいですよ。ほら、みんなこことばかりに走つて行く。すごいしやがよつた。あー、転ぶ。

男子 (窓の外を見て) あれはなんですか？

男子、立ち上がり、

男子 運転手さん見て下さい！大変です、動物が逃げてます。

運転手 ああ、それは逃げてるんじゃないくてね、普通に居るんですよ。

男子 普通に居る？

運転手 そうなんですよ。

男子 じゃああれは野生の動物なんですか？

運転手 うん、そう。君は鹿を見た事ないの？

男子 あれが鹿か。

運転手 そうなんです。さ、行つて来なさい。

男子 凄い！野生の動物がその辺をうろつろつしているなんて、なんて平和な町なんだ。

運転手 さ、行つて来なさい。

男子 大阪だったらみんな食べられてしまうところだ。

運転手 君は凄い事言うね。あとで大阪の人にボコボコにされるがいい。

男子 それにしても僕の知ってる鹿とは随分違うなあ。

運転手 近くで見えて来なさいな、可愛いよきつと。

男子 鹿つてそんなに種類が居るんですか？

運転手 そりゃあ居るだろうね、トナカイだつて鹿だからね。

男子 ああ、トナカイも鹿か。

運転手 ほら、行つて来なさい。

男子 この鹿とトナカイはどう違うんですか？

運転手 さあ、どう違うんだろう。行つて確かめて来なさい。

男子 トナカイは、ソリを牽きますもんね。鼻も赤いし。

運転手 うん、それはサンタさんの飼つてるトナカイだな。

男子 え？

運転手 いいかい、トナカイだって、ソリを牽くからトナカイだって思われたら心外だと思っよ。

男子 え？

運転手 そんな事言ったら誰だってソリを牽いたらトナカイになっちゃいますから。

男子 え？

運転手 極端な話、男と女くらい違うだろうね、トナカイと鹿は、さ、行って来なさい。

男子 どっちが男ですか？

運転手 …じゃあ聞くけど、君は何を持って男なんだい？

男子 何を持って男か？

運転手 そうだ、男と女はそれはそれは違っだろう？それと同じようにトナカイと鹿も違っんだ。さあ行って来なさい。

男子 男は、勇気を持っている！

運転手 うん、そういう精神的な話じゃない、女の人でも勇気ある人は居るからね。さ、行って来なさい。

男子 そうか、男が持っているものとは、

運転手 この話はもういいんだ、行って来なさい。

男子 チンコか。

運転手 とにかくここに居るのはただの鹿であってトナカイじゃない。もう一度おさらいだ。鹿はソリを牽いてもトナカイにはならない。鹿の鼻を赤く塗ってもトナカイじゃない。

男子 でも男はチンコを牽いたら女になりますよ。

運転手 それはね、牽いての意味が違っし、なんかへんてこな絵が浮かんじやうから止めてくれ。

男子 チンコが赤くなつたら、

運転手 それは病気だ。もう君チンコから離れなさい。とにかくここに居る動物はトナカイじゃない、鹿なんだ！

男子 …そうか、僕の知ってる鹿は、トナカイだったのか。どろりで違っ誤だ。

男子、座。

運転手 …ごめんね、大きい声出したねおじさん。結局はさ、トナカイも鹿も、鹿だからさ。行って来なさいよ、楽しいよ。

男子 …。

運転手 降りないつもりかい？

男子 あ、はい。

運転手 ああ、そう。

男子 はい。

運転手 うん。まあね。別に独りだっいいじゃないか。おじさんもね、高校生の頃は友達なんか一人も居なかつたよ。修学旅行なんか苦痛以外の何物でもなかつたね。

男子 …。

運転手 友達なんか居なくても、今こうして立派にやって行けるんだから、悩むだけ無駄なんですよ。だから行って来なさい。鹿と遊んで来なさい。君の心は鹿が癒してくれる。鹿が居るだけイイよ奈良は、おじさんなんか倉敷だつたからね、独りですつと鯉見たからね。あの頃の私は

男子 あ、しょうごさんだ。しょうごさん！

男子、窓の外に向かって手を振る。

運転手 あ、良かったねえ。迎えに来てくれたんですね。さあ行って来なさい。

男子 しょうごさんが僕に手を振ってくれています。

運転手 うん、そりやあ良かった。さ、行きなさい。

男子 しょうごさん！

運転手 そういう子が居るんだいつの時代も、学級委員みたいな、世話焼きの子がね。

男子 しょうごさん。

運転手 さ、行って来なさい。

男子 しょうごさん。

運転手 さ、行って来なさい。

男子 しょうごさん。

運転手 行って来なさいよ！いつまで手を振つとるんだ君は。

男子 あれ？なんだ？しょうごさんは僕に手を振っている訳じゃないみたいだ…。

運転手 …弱つたなあ、せつかくの自由時間だと言っのに。

運転手、懐から文庫本を取り出し、開く。

男子 しょうごさんの元に鹿が集まってきましたよ！しょうごさん！危ない！しょうごさん！

運転手 鹿せんべいでも持っているんですよ。

男子 あ、食べられる。あ、しょうごさんの手が…

運転手 (本を読みながら) ほら、君も行って来なさい。
男子 しょうごさん！逃げてー！早く逃げてー！

バスの外で、女子生徒・しょうごが叫ぶ。

しょうご 太郎君！

男子 あー、しょうごさんが、しょうごさんが鹿に…

運転手 奈良の鹿はお辞儀をするそうですよ、人間にとっても馴れているんですな。
しょうご 太郎君！

男子 え？！なんですか？え？全寮聞こえないよー！

運転手 窓開けたら良いんじゃないかな。

男子 え？カ・ブ・ト・ム・シ？カブトムシがなに？

しょうご タ・ロ・ウ・ク・ン…。

男子 カブトムシが何だよ！ちくしょー、全寮聞こえない…。

運転手 窓開けたらいいんじゃないかな。

しょうご きゃー…！

男子 しょうごさん！しょうご…。(泣き崩れる。)

運転手 うるさいなあもう、泣くくらいだったら君も行ったらいじやないか。

男子 しょうごさん、僕は、僕は君の事が、ずっと、一年の時から君の事が…

運転手 なんだろうなこの子は…、きつとバカかな。

男子生徒・友貴の声が聞こえる。

友貴 太郎ー！太郎ー！

男子 (目を凝らし) ん？誰だ？あ、友貴達のグループだ。

友貴 太郎、逃げろー！早くどこかに行くんだ！

男子 僕は友貴達が大好きなんです、あいつら何かにつけて僕をバカにするから。

友貴「くそっ、このこのこの、うわ…、く、くらっ…、く、うわ…、は、はあああ」

男子 さっきだってそうです。僕が大好きなやきそばのお弁当をあいつは肉が入ってないから貧乏やきそ

ばだつてからかうんです。あれは肉が入っていないんじゃない、僕はそばのやきそばが好きなんだ。細切れの肉よりもまんべんなくそばに絡まるからね。あいつらはグルメリじゃない、腹が膨れりやあなんだ。っていい低能な奴等なんです(窓の外を見る)、あーあ、ほら鹿に、あー、あーあ、

友貴 太郎ー！これをー！これを持って行け！

男子 聞こえない振りをしよ。実際聞こえていないんだから僕は悪くない。あーもう近寄って来るんじゃないよ、なんだつてそんな真つ青な顔をしているんだ友貴の奴。

友貴 太郎ー！受け取れー！

男子 うわ、なんか投げて来た。

運転手 え？

男子 きつたねえ。もおほんと最低だなあいつ。

運転手、立ち上がり、窓を見る為後方へ。

運転手 ちよつとお、もお止めてよ、うんちうんちでしょお？

友貴 太郎、お前は、生きろ…、生きるんだ…、うわー！

「バキバキ、ボキボキ、グチャ」

運転手 (窓の外を見て)…。もお、バスは運転手が掃除するんですよ、中も外も。これひどいと思わな

いっ会社ですつと椅子に座って仕事してる奴が居るって言うのになんだろうこの労働の差は。

男子 なんだろう…、

運転手 だろ？

男子 この物悲しい感じは、僕は何か、大切な物を失った気がする。

運転手 やれやれ、ここの先生は何をやっているんだ、生徒が一人残っているというのに気づきもしない。

先生の声。

先生 竹内ー！

男子 噂をすれば先生だ。せんせー！

運転手 やつとか、普通点呼くらいするもんだろ(運転席に戻り、本に目を落とす)。

先生 いいか竹内！これからの世の中はな、全てを疑って掛からないとダメだぞ。目に見える物が全てで

はない。

男子 せんせー！

先生 人はこの地球にある全ての物を利用して、飼いや慣らしているような気になっているが、それはほんの一部分を見ていただけで本当の力は計り知れない。みんなこの星で、生かして貰っているという謙虚さを忘れてはいけない。

男子 あー、鹿が：周りを、あー、

先生 そうすることで、我々の未来の有るべき姿が見えて来るんです。そして、うわー！

男子 せんせー！せんせー！……くそ、なんにも聞こえなかった。

運転手 呼んでるんですよ、早く行った方がいいよ。

男子 (座り) これは大変だ。大変な事になっている。

運転手 君が行かないからだよ。

男子 だから修学旅行なんか止めたら良かったんだ、みんなのバカ。

運転手 君さ、

男子 はい。

運転手 バスに乗っていたかったらとりあえず先生に聞いて来なさい。私の一存では決められないんだ。

男子 この状況で聞けるだろうか、この僕に…。

運転手 幾ら自由行動と言ってもね、そこまで自由じゃないと思いますよ。

男子 え？

運転手 ずっとバスに乗ってもイイなんてそんな自由は無いと思いますよ。

男子 でも自由行動なんですよね？

運転手 いいかい、まず自由というのは不自由があつてこそその自由だからね。

男子 は？

運転手 始めから自由だったら自由なんて思わない訳でね、だからここで言う自由行動というのは不自由を前提とした自由行動な訳だからね。

男子 は？

運転手 つまり不自由だからこそ自由行動なぞと言っているのであつて、そもそも自由だったら自由行動なんてわざわざ言わない訳ですよ。

男子 は？

運転手 つまり不自由なんです！私が！君が自由になることで私の自由が奪われてしまうという事になぜ気付かない！

男子 僕が自由になることで、運転手さんが不自由になる…！

運転手 そうなんだ。人はどこかで他人に影響を及ぼしている、気楽に自由などを求めるものじゃないんです。

男子 窓開けてもいいですか？

運転手 うん、イイって言ってんじやん。ねえ話聞いている？

男子、前の方で窓を開ける。

「ひゅー」風が吹いている。

運転手 ほらまた勝手にそういう事する。そんなところ開けたらバスの形がもうあやふやになっちゃうですよお？

運転手、自分の椅子を移動させ、なんとかバスの形を維持する。

男子 静かだ、まるで誰も居ないみたいだ…。

運転手 なんなんだ全く…。だからこんなバカ高校の修学旅行は嫌だったんだ。こんな紅葉も終わった時期に、こういう年間スケジュールなんだ。

バスの下の方から、友貴の声が、

友貴 太郎…、

男子 (覗き) 友貴…、大丈夫か？

友貴 俺はもうダメだ、半分食われちゃった。

男子 鹿か？鹿にか？

運転手 ちょっとお、バスの下で遊ばないですよ(覗く)。

友貴 これを、これを持って行け、

竹の先に挟まれたお守りが伸びてくる。

男子 これは、お守りかい？

友貴 春日大社で買ったんだ。それを持っていけば、大丈夫だから。

男子 どういう事？

友貴 それを持っていけば、大丈夫だから。

男子 でも…、汚い。

友貴 いいか、鹿が集まってきたら、そのお守りを見せるんだ。そしたら、うわー！

男子 友貴！友貴ー！

お守りが引つ込む。

運転手 (窓を閉め) はい、もうダメですよ、ホントに。元氣だったら外で遊んで来なさい。

男子 くそー、僕にもっと力があれば…

運転手 あ、そうだ。この辺はね、最近流行のパワースポットらしいですよ。

男子 パワー？

運転手 うん、行ってお参りしてきたら？君も強くなるかもしれないよ。

男子 え、どこですか、どこに行けばパワーになりますか？

運転手 そりゃあ春日大社ですよ。

男子 春日大社か、どう行けば近いですか？

運転手 すくだよ。その砂利道をちよろつと走って行けばすぐですよ。

男子 そうか…、よし。

運転手 さ、行つて来なさい。

男子 よし！そこに行けば僕は、パワーになる。

運転手 そうだ、君はパワーアップする。

男子 でもそこに行くまでの僕はノーパワーのまんまです。途中で鹿にアタックされたらどうしよう、どうしよう運転手さん。

運転手 友達を助けたいんだろ？だったら行くしかないじゃないか。

男子 鹿の奴は足がフラストだからな…

運転手 いいかい、誰だつて始めからパワーは無いんだよ、みんな努力して、パワーになるんだ。さあ行き

給え、ユーなら出来る。運転手さんはそう思ってる。

男子 さっきのお守り、あれを持ってれば鹿が寄って来ないと言ってた…

運転手 あ、そう。じゃあ取りに行き給え。それでユーは無敵だ。

男子 じゃあなんで友貴は襲われたんですか！運転手さんのライヤーー！

運転手 ユー達ね、ホント鹿を題材にして遊んでると罰当たるよ。天然記念物に失礼だよ。

男子 んな事言ってるから調子に乗ってこんなに鹿が暴れ回っているんじゃないですかナウ！くそー、鹿

めー！

運転手 お、その意気だ、その勢いで行つてこい！

男子 うおー、行つてやる！猛ダッシュでえー！鹿なんかにい、僕は、うーやー！

運転手 行きなさいつたら！

男子 んぐぐぐぐ…

男子、動かない。

運転手 ヘイボーイ！君は言ってたろ、男は何を持って男なんだ！

男子 男は、チンコを持っている！

運転手 違う！それじゃない！

男子 男は、勇気を持っている。

運転手 そう！君には勇気がある。

男子 僕には、勇気がある！

運転手 友達を助ける事が出来るのは君だけだ！

男子 はい！

運転手 だから行ける！

男子 だから行ける！

運転手 走れ！

男子 走れ！

運転手 …、はよ行け！

男子 はい！

運転手 …、行け！

男子 はい！

運転手 …、はあ？！

男子 あれを見て下さい！また鹿が僕の友達達を！

男子、また自由に窓を開けるので、運転手は椅子を移動させてバスの形を維持する。

男子 みんな！待つてろ！今に僕が春日大社まで走って行ってパワーになるからな！そしたらみんなをへルプに行くんだからな！

運転手 (遠くを見て) みゆき、元気ですか？お父さんです。

遠くから女子生徒・小百合の声。

小百合 太郎君！

男子 君は、小百合さん！

運転手 君はくれぐれもバカとは付き合わないで欲しい。

運転手、文庫本に挟んである写真を取り出す。

小百合 太郎君見て！私遺言を書いたのよ。

男子 遺言？何言っただよ、ダメだよそんな事言っちゃ！

運転手 バカというのは、時間を無駄に使う天才の事だ。

小百合 これをどうかお家で待っている私の家族とかに渡してちょうだい。

男子 とかってなに？どこまでが家族？

運転手 人生は短い、気を付けろ。

小百合 私はもう動けないの、鹿が私の足にかぶりついているから。コラ！シッシン！

男子 おい、君はそんな状況で遺言を書いたのか、偉いぞ！

運転手 誰かに頼りたくなる時もあるだろう。でもね…

小百合 鹿がシカトしている間に書いたのよ。

男子 おのれえ鹿ー！小百合さんにそんな事まで言わせるのかー！

小百合 しかし、鹿を叱るシカない。

男子 おお！

小百合(オフで)「シカの通う医者は何？歯科。お菓子を食べ過ぎたから。しかも四角い干し」

からびたイカ。これはいかん。イカになっちゃった…」

運転手 お父さんが近くに居たら、ずっと君を守ってあげられたのに…

男子 わかったもついいー僕が必ず届けてあげる、どうしたらいい？

運転手 うるさいよ、取りに行きなさいよもう！

小百合 今ここで読むから、それを書き写して。

男子 よし、ちよつと待って、今紙とペンを用意するから。

小百合 早く、早くして、もう鹿が、

男子 鹿めー！

運転手 例えとれだけ離れていようと、お父さんは、

男子、運転手から写真を奪い。

運転手 あ、コラ！

男子 さあ、いいぞ、言ってくれ！

運転手 返しなさい！(奪いとる)

小百合 お父さん、お母さん、ふつつかな娘でしたが、

男子 小百合さん、お嫁に行くみたいだよ。

小百合 きゃー！

男子 小百合さん！小百合！

運転手 あー、罨か…

男子 …小百合さん、僕は君のことが、一年の時からずっと…

運転手 君、さつきもそんな事言っただろ。嫌われるぞ。

また友貴の声。

友貴 太郎…

男子 友貴…お前まだ生きてたのか！

友貴 太郎、俺も遺言を書いた。届けてくれ。

男子 どうやって書いたんだ…

友貴 お父さん、お母さん…

男子 ン判った、お前は手を伸ばせば届く、さあよこせ。(手を出す、すぐに引つ込める) お前、その手

…

友貴 半分鹿になっちゃった。

男子 ちよつと、ちよつと待てよ…

友貴 まだ理性は俺だから、大丈夫だから…

男子 運転手さん、どういう事ですか！

運転手 何かあ？

男子 鹿に噛まれると鹿になるんですか？そんな危険があるのに僕を春日大社まで走らそうとしたんですかあなたは！

運転手 何を言ってるんだ君は。

友貴 太郎！早く、早くこれを！もう時間が無いんだ、全部鹿になる前にこれを、

男子 でもお前、さっき半分食われたって言ってる。それで今半分鹿になってるって事はもう全部鹿になってるって事じゃないか！

友貴 違う！半分の半分だバカ。

運転手 (友貴に) コレ！もういい加減にしろよ。

運転手、窓から顔を出そうとするが、

男子 もう気持ち悪い！ぴしゃ(窓を閉める)。

友貴 太郎！

男子 運転手さん、バスで春日大社まで行けませんか？

運転手 何を言ってるんだ、そんなしたら凄く罰則受けるわ国から。

男子 だって噛まれたら鹿になるんですよ。

運転手 しょうがないだろうそんなの、なっちゃう物は。

男子 …。

運転手 そういう事もあるんでしょう？

男子 …。

運転手 だってわかんないもん私にはそういうの。

男子 …、ガラガラ(窓を開け)、みんな、生きろー！絶対に諦めるんじゃないぞー！僕が、この僕がきつとみんなをー！

運転手 うるさい子だなあ、だから一人ぼっちなんだな。

男子 呟だ、呟が聞こえる…。合唱コンクールの呟だ。

運転手 呟なんかどこにも…

みゆきの声。

みゆき おとーさん。

運転手 …？

♪「魔王」

幼稚園の頃の友達・コースケの声。

コースケ 太郎ー！

男子 え？

コースケ 電気屋の加藤だ、加藤コースケだ。

男子 運転手さん、知らない奴が来た。

運転手 あ？ああ、そう？

コースケ 幼稚園の頃、君は毎週土曜日うちでお昼(飯を食、べていた。君のお母さんの車で、僕も乗って、

男子 あ、覚えてる。あ、壁にひまわりの絵が描いてある電気屋？

コースケ いつから来なくなっただい。

男子 え？

コースケ どうして忘れてしまっただい。あんなに仲良かったのに。

男子 でも、あの電気屋はもう無いでしょ？

コースケ まだあるよ。ひまわりの絵は消してしまっただけ。うちはあのまんまだよ。

男子 こんなところで何やってるの？

コースケ スーフアミのシムシティ返して。うわー！

男子 コースケ、コースケー！君はそんな事を言うためにわざわざ奈良まで来たのか…。

しょうこ 太郎くん！

男子 しょうこさん！

しょうこ 太郎君！

男子 カブトムシが何？！

小百合 太郎君。

男子 小百合さん！

小百合 この鹿を叱って。

男子 コラー！

友貴 太郎…。

男子 友貴！わ、もう友貴じゃない！

先生 竹内ー！

男子 先生！

先生 この間先生が買い物に出掛けた時、ぱっと足元を見たら

男子 なんの話だ、先生のバカ！

コースケ 太郎、麦子ヨコあるぜ。

男子 今要らない！

少女・アキの声。遠くでは先生の面白い話がかすかに聞こえている。

アキ 太郎君。

男子 …君は、誰？

アキ 忘れちゃったの？

男子 え、誰？

アキ きゃー！

男子 誰だー！…誰か知らないけど、僕は君の事が、一年の時からずっと…、

アキ、出てくる。手にはラジカセ。

アキ もう忘れちゃったの！？顔も名前も忘れちゃったの！？

男子 え？

アキ ほら、良く見て。思い出せないの？

男子 その頭なに？ツノが生えてる。

アキ これはね、ツノじゃないよ。

男子 じゃあなに？

アキ …、ツノじゃない。

男子 じゃあなんだよ！

アキ、男子のすぐそばまでやってきて、ラジカセを渡す。

男子 …。

みゆき おとーさん。

男子 …だから修学旅行なんて来たくなかったんだ。

アキ、去って行く。

運転手 判りますよ。でも我慢ですよ。

男子 …もつと、みんなと仲良くしておけば良かった。

みゆき おとーさん。

男子 もう帰ろう。気分が悪いんだ。

運転手 寝てなさい。

男子 寝ると、鹿が追いかけてくるんだ。

運転手 …大丈夫だよ。夢だからそれは。

みゆき おとーさん。

運転手 …よりよって今日は良い天気じゃないか、散歩でもしたかったけどね。

男子 いつでも会えると思ったら大間違いだからね。すぐに、忘れてしまっからね。

運転手 忘れる訳ないだろう。

男子 小学校の友達も、幼稚園の友達も、居たはずなのにみんな忘れてしまった。

運転手 …。

男子 もう行こう。

運転手 …そういう訳にはいきませんよ、みんな戻って来るんだから。

男子 だって、鹿が僕に話し掛けて来るから。

男子、ラジカセのスイッチを押す。

すると、今までのように、友貴、小百合、先生、コースケ、アキの台詞が流れてくる。

運転手 気のせいだよ。枯れ葉が風に揺れてる音だから。

男子 (外を見て) ほら、大きな鹿が追いかけてくる。大きな大きな鹿だ。バスを一飲みしてしまっから

いの大きな鹿だ。

運転手 それはね、枯れ果てた大きな木の枝だよ。もう寝てなさい、君はうるさいんだから。

男子 修学旅行なんか来たくなかったのに、先生が無理矢理…。

運転手 明日は、京都ですからね。

男子 …。

みゆき おとーさん。

男子 お家に帰りたいよ、お家に。

運転手 もうすぐみんな帰って来るから。もう、自由時間は終わりだから。

男子、ラジカセを座席に置いて去っていった。

♪ 『魔王』の音楽は終わっている。

ラジカセからは「サー」というノイズが流れている。

運転手 それにしても、誰一人戻って来ない。まるで誰も居ないみたいだ。

溶暗。

く終く

この戯曲の著作権は、作者である平塚直隆にのみ帰属するものです。
上演許可あるいはその他のお問い合わせは、作者の所属する「オイスターズ」どうぞ。

■ オイスターズ ■

ホームページ

<https://oysters.official.jp>

メールアドレス

theatrical_unit_oysters@yahoo.co.jp